

平成 27 年度

大阪大学

文学研究科・文学部 インターンシップ報告書

編集・発行

大阪大学 文学研究科・文学部
教育支援室

560-8532 大阪府豊中市待兼山町 1-5

平成 28 年 8 月

目 次

はじめに……………	教育支援室インターンシップ専門委員(文学研究科教授)	片山 剛	1
1 音楽関係			
1.0 音楽関係インターンシップ概要……………	文学研究科教授	伊東 信宏	2
1.1 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール インターンシップ報告 ……………	文学研究科博士前期課程1年(音楽学)	名田 青麻	3
1.2 京都コンサートホール インターンシップ報告 ……………	文学部3回生(音楽学)	田井中 朝日	9
1.3 インターンシップ生受け入れに関するコメント ……………	あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール 支配人	吉元 晃	14

はじめに

本報告書は、平成 27 年度に大阪大学文学部および大学院文学研究科で行われたインターンシップ、ならびにその準備や事後指導を行っている授業について報告したものです。企業が募集し、学生が応募して参加する形で行われる、授業とは無縁の「インターンシップ」も、近年増加していますが、本報告書は、あくまで文学部・文学研究科の教員が働きかけて調整し、授業の一部として実施しているインターンシップの報告をとりまとめたものです。以下に、平成 27 年度における実習先、人数、期間を記しておきます。

音楽関係

○いずみホール	学部生 1 人	5 日間
○あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール	大学院生 1 人	5 日間
○京都コンサートホール	学部生 1 人	5 日間

報告書を読みますと、例年と同じく、インターンシップに参加した学生にとって、実習先での体験がかけがえのないものであったことが読み取れます。ザ・フェニックスホール支配人の吉元晃さまの文章を含め、味読をお願いする次第です。そして、大学側の希望を真摯に受けとめていただき、さまざまなお手数とご迷惑をおかけしているにもかかわらず、学生たちを迎えて指導してくださっている受け入れ諸機関の皆様、この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

文学部・文学研究科としての報告書のとりまとめは平成 16 年度から始まりますが、関連授業が毎年開講され、現在のような体制となったのは 18 年度です。そして 18～27 年度の 10 年間に、音楽・演劇・美術・映画の各方面のインターンシップが行われてきました。ただし映画関係のそれは、26 年度末に担当教員が定年退職したため、現在は開講されておられません。また 27 年度は、種々の事情から演劇・美術のインターンシップに参加した学生はおりませんでした。10 年間の歩みを回顧し、18～27 年度にインターンシップに参加した学生数を掲げておきます。

	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	小計
音楽	5	3	4	2	4	6	6	3	3	3	39
演劇	4	4	4	3	2	6	2	4	3	0	32
美術	0	0	0	2	2	1	1	1	0	0	7
映画	1	0	1	0	0	0	1	4	0	—	7
小計	10	7	9	7	8	13	10	12	6	3	85

(単位修得を目的とせずに、インターンシップに参加した学生の数を含む)

教育支援室インターンシップ専門委員 (文学研究科教授) 片山 剛

1 音楽関係

1.0 音楽関係インターンシップ概要

文学研究科教授 伊東 信宏

平成 27 年度の音楽に関係するインターンシップも、例年どおり、いずみホール、ザ・フェニックスホール、京都コンサートホールの 3 館に受け入れを承諾していただき、3 名の学生、院生について実施した。2 学期開講の「音楽学演習」受講生を母体としているが、ザ・フェニックスホールのインターンシップについては、大学院生に声をかけて参加してもらうことになった。以下にはザ・フェニックスホール、および京都コンサートホールでのインターンシップについてのみ、受講生からの報告を掲載する。

内容については、以下の報告をご覧ください。ここではインターンシップ全体の経緯を時系列に即して書き留めておく。後述のとおり、1 名については日程を再調整する必要があり、いつもとは違って、時期が春先にずれこんだ。これに伴って、報告会を年度内に行うことができず、結局平成 28 年度に入ってから、4 月の学部ゼミの時間に報告を聞くことになった。

- ◆ 2015年4月「音楽学演習」（前期）の開講に伴い、インターンシップの受講者を募集。今回は2名の希望者があり、もう一枠については大学院生から希望者を募った。その後、研修先を決定した。
- ◆ 10月20日（火）～26日（月）の5日間、いずみホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 12月2日（水）～6日（日）の5日間、京都コンサートホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 2016年2月22日（月）～2月26日（金）の5日間、ザ・フェニックスホールでのインターンシップ実施。
- ◆ 4月25日（月）、上記3つのインターンシップについて、音楽学研究室の学部演習において、受講者3名が報告。

上記のホールで、今までこのインターンシップをはじめとして、いろいろなことでお世話になっていた方々が、今春から新しい仕事に転じられた、と聞いている。これからもご協力をお願いすることになると思うので、淋しくなるわけではないが、世代交代の時期なのかもしれない、と思う。

ともかく今回も、受け入れていただいていたホールのスタッフの方々には、本当にお世話になりました。心からお礼を申し上げます。

1.1 あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

インターンシップ報告レポート

〔学生からの報告〕

文学研究科 音楽学 M1 名田 青麻

【研修先】

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

MS&AD ビジネスサポート(株) ザ・フェニックスホール本部

【ホール概要】

場所：大阪市北区西天満 4-15-10

開館：平成7年5月13日

席数：1階席 168席 2階席 133席 合計 301席（最大 335席）

構造：乾式浮き構造

【研修期間】

平成28年2月22日（月）～2月26日（金）

【研修最終日の公演】

公演名：ティータイムコンサートシリーズ

「ハープ・アンリミテッド 福井麻衣リサイタル」

公演日時：平成28年2月26日（金） 開場：13:30 開演：14:00

会場：あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール

出演：福井麻衣（ハープ、エレクトリックハープ、打楽器、語り）

井上麻子（サクソフォン）

入場料：一般 2500円 友の会価格 2250円 学生 1000円

【研修スケジュール】

一日目 2月22日（月） 午前9時～午後5時10分

①ホール職員紹介（全体朝礼）

②ザ・フェニックスホールの概要

③ホール内案内・機械室等

④貸館事業、貸館受付、インフォメーション詳細

⑤チケットセンター

二日目 2月23日(火) 午前9時～午後5時

- ①自主企画事業、公演広報1
- ②SALON 発送作業

三日目 2月24日(水) 午前9時～午後5時

- ①自主企画事業、公演広報2
- ②機関紙「SALON」について
- ③「福井麻衣」ホームページリサイタル全体会議
- ④チラシ挟み込み
- ⑤ホームページについて

四日目 2月25日(木) 午前9時～午後5時

- ①著作権・友の会組織・運営
- ②リハーサル見学

五日目 2月26日(金) 午前9時～午後10時

- ①ティータムコンサート「ハープ・アンリミテッド 福井麻衣リサイタル」公演準備
「公演当日の対応について」を研修テーマとして
ホール内準備、公演本番、終演後対応の実務実習

【感想】

第一日目

- ・ ①ホール職員紹介(全体朝礼)／②ザ・フェニックスホールの概要／
③ホール内案内・機械室等／④貸館事業、貸館受付、インフォメーション詳細
⑤チケットセンター

最初の挨拶や自己紹介のあと、ホールの概要や基本的な特徴の説明をうける(メセナ活動の一環というホール設立の趣旨、最大335席というサイズからくる「現代のサロン」としての性格づけ、室内楽中心、ポール・ギアマンの絵画を始めとする美術作品によるサロンの演出、夜景をのぞむことができる可動式遮光壁など)。

続いて、ホール施設の見学に回る。これについては、ビル内の数フロアにわたって縦長におさまるホール全体の構造、またビル3Fがホールの1階に相当するという「ズレ」などから、「行きたいところへ行くのに直感的なルートではなかなか行けない」というスタッフの仰る通りの印象だった。実際、研修最終日のコンサートの際には、種々の案内掲示やアナウンス、そしてレセプションистによるお客さまの個別のナビゲート等を多く目にした。この特殊な構造は様々な配慮を要するようだ。

つづいて貸館業務の詳細をきく。年に10数回しかない「自主公演」に対して、年間160-170

公演の「貸館公演」は年間公演数に大きく影響する。公演数というのはホール運営上の重要な指標であり、つねに一定数をこなす必要がある一方で、開館から20年が経過し、しかも他のホールに比べて可動部分の多い「ホール設備の保守管理」の時間も確保しなければならない。「適切な公演数」をどこに見出だすかというのは、たしかに難しい問題である。

チケットセンターの方には、(若い人の正直な意見を、とのことだったので) チケット予約の際に郵送や実際に足を運んでホールまでとりにいく今の方式は少々煩わしい、もしネット上ですべての手続きが済むのなら、総じて細かな手間を厭う若い人にはアピールするのでは...といった内容の質問をしてみた。それに対しては「そうできたら非常にいいのだが、システムの導入コストなどを考えると現状なかなかままならない」ということであった。「そうしたいのは山々ののだが...」といった風の話しぶりからは、大型ホール的なお手軽さを何にでも求める消費者的態度というのは、もしかすると中規模以下のホールに対する暴力(大袈裟に言えば)にもなりうるのかもしれない、と感じた。

第二日目

・ ①自主企画事業、公演広報1/②SALON 発送作業

ホール自らが企画・主催する「自主公演」は、数のうえでは多くはないが、貸館公演の内容や性格に大きく影響するといわれるため、ホールにとっては重要な意味をもつ。企画の方針は、基本的にはメセナ施設としての趣旨にそったもの...すなわち社会に対して新しい価値を提供する、若い世代を育成するなどの形で社会貢献をおこなう、というようなものであり、これを実現するような企画やプログラムが組まれる訳である。それには実力はありながら未だ注目されないアーティストの招聘、優れた演奏家による後進育成の機会の提供などさまざまな形がありうるが、レクチャーの中で強調されていたのは、それらの企画を「誰に向けて」行なうかを常に意識する、ということであった。ただ物珍しい公演を用意するということだけならさほど難しいことではないが、それが独りよがりなものではない。企画においても広報においても、社会の潜在的な需要を読み、対象層をはっきりイメージして絞ることが重要で、それが曖昧な場合にはきめんにチケットの販売数に表れるのだそうである。

次の発送作業とは、SALON というホールが発行している機関紙を、定期的に友の会(ともに後述) 会員に向けて送付するさいの事務作業である。計1000通以上のSALONを関連のコンサートチラシとともに一まとめにして封筒に入れ、宛先ラベルを貼ってゆく。他のホールでは機械によって自動で行なうところもあるそうで、何でもない作業といえば何でもない作業なのかもしれないが、手のあいた人が総出で行なう様子から「スタッフが少数だと何でも屋的になる」というのがよくわかり、また作業をしながら色々な話をきくことが出来、個人的には得るものの多い時間であった。

第三日目

- ・ ①自主企画事業、公演広報 2 / ②機関紙「SALON」について
③「福井麻衣」ハープリサイタル全体会議 / ④チラシ挟み込み
⑤ホームページについて

機関誌「SALON」について。特に力を入れているというだけあって、他のコンサートホールで発行するこの手のものと比較しても、かなり充実して読み応えがある。しっかりした読み物記事のいくつか載った、ほとんど小規模な音楽雑誌の体裁であり、一見してリサーチや校正・編集作業の大変さがうかがえる。内容は、コンサート情報やおすすめ公演の紹介などのほかに、各地の室内楽ホールのインタビューや紹介をしたり、演奏家による気軽なコラムが載っていたりと、目先の広報だけに終始しないものが載せられており、面白く読める。発行部数は 1700 部、これが 1000 名余りの友の会会員に郵送されるほか、ホールの館内、親会社にあたるあいおいニッセイ同和損保や関連企業、各種メディアや他のコンサートホールなどに配布される。

またホームページを含む、Web 上での広報活動、あるいは今後の演奏のネット配信の可能性などについて話を聴く。近年 SNS が無視できないほどの影響力を持ってきているのは認識しているし、ベルリンフィルによるデジタル・コンサートホールの試みなども挙げながら、これまでになかった形で存在をアピールしてゆくことに対してホールとしては決してやぶさかではないのだが、いわゆるネット上での「炎上」などのトラブルも警戒される場所であり、積極的に打って出るというのもなかなか難しいようだ（もちろん費用面のこともあるが）。いわば「何でもあり」のインターネット上で、どのようにホールとしての品位を保つかということについては、まだどこも模索中の現状がうかがえる。

この日は研修最終日の「福井麻衣ハープリサイタル」についての全体会議にも出席する。当然といえば当然だがみごとに様式化されていて、「公演打合表」をもとに、大まかなスケジュール、楽屋や駐車場、託児室の使用状況など、今回の要点だけをピックアップしてスピーディーに確認、本当にあつという間に終わってしまい驚く。

第四日目

- ・ ①著作権・友の会組織・運営 / ②リハーサル見学

このホールの会員組織は、「フェニックスホール友の会」と「E-PHX メール会員」の二種類がある。友の会は年会費 1000 円で、チケットの先行予約、チケット代金の割引、提携の飲食店における代金割引、そして情報誌「SALON」の送付などの特典が受けられる。メール会員はもう少しお手軽で、会費は無料、チケットの一般より 1 日前優先予約、メールで公演情報などの特典である。会員数は友の会で 1000 名強、メール会員が 1200 名ほど（重複数は不明）とのこと。友の会は維持すべき最低ラインをとりあえず 1000 に据えているらしい。印象に残っているのは友の会の案内パンフレットである。これは案内のチラシであるだけでなく、そのまま切り取って端を折ってのり付けすると封筒になるというような作

りになっている。「これ一つで完結するようにしたかった」と仰っていたが、こうしたものは、一般のお客さまの立場からすると、どこのホールでも「お決まりのフォーマット」が確固としてあるようなイメージがあるが、実際はかなり個々に工夫をこらしているようであるというのをこのとき感じた。パンフレットの文言についても、「お決まりのフレーズ」であるような印象を抱きがちだが、実際にはひとつひとつ模索しながらよく練って構成されたものであるということがよくわかった。「いつもの格式あるホール像」というのは、こうした個々の工夫やアイデアを集積する努力によって維持されている、というのが本当のようだ。

ほかに著作権について。コンサート中のすべての演奏曲は、ストップウォッチで時間を計測して、届け出という手続きが求められる。驚いたのは、演奏者がコンサートの時間のなかで機嫌をよくして鼻歌を歌っても、届け出の必要があるそうで、そのあたり不思議な気もするが、ともかくそういうふうになっているとのことである。

第五日目

- ・ ①ティータイムコンサート「ハープ・アンリミテッド 福井麻衣リサイタル」公演
(公演当日の対応について、ホール内準備、公演本番、終演後対応の実務実習)

最終日には自主公演の実務実習。実習生の私は、普段のプライベートの演奏会ではステージマネージャー的な役回りを務めることも少なくないため、多少なりとも役に立とうと意気込んでいたのだが、実際にはあまりの物事のテンポのはやさに全く入りこむ余地はなく、むしろ邪魔にならないようつとめるのが精一杯であったので、諦めて、用意して下さった「インターンシップ生 当日の動き」を参考にしつつ、できるだけ多くのセクションを見学して回った。いくつか気づいたことをピックアップする。

当日のスタッフの動きについては、必要なことは（本来の担当の領分にかかわらず）皆が了解しているような印象で、てきぱきとその場にいる人が必要なことをこなしていく、といった様子。このあたりもスタッフが少数であることの特徴かもしれない。ただレセプションニストは「外注」であるので、公演前、ホールスタッフからレセプションニストのチーフのような人に、その日の仕事内容を伝達するタイミングがあった。それも非常に淡々としたテンポで、本当に伝わるのか不安になるほど手早くすんでしまう。

来場のお客さまについて。事前に平均年齢 70 歳と聞いていたのは、正直なところ半信半疑であったが、実際私が当日みたかぎり、335 名の来場者中、4-50 歳以下に見える人は 5 人も居なかった（平日昼間の公演ということはあるが）。そういえばホールの方は実習中、「われわれは若い人の正直な意見を必要としているから、遠慮せずにきかせてほしい」とは何度となく言っておられたが、その危機感の理由がよくわかった。

当日の演奏者は、ハープの福井麻衣さん。押しも押されもせぬ実力派ながら、今回の公演はハープの常套的なレパートリーにはじまり、早変わりしてのエレクトリックハープの弾き語り、井上麻子さんのサクソとのデュオまでをわたりあるく、性格としてはかなり

チャレンジングなものであった。そういう積極的な企画意図もあってか、リハーサルのと
きからそうだったが、ご本人の本番にかける集中力の度合いはちょっと周りにいて怖くな
るほどで、それがそのまま聴衆の集中力を呼びこんだような形で、コンサートは非常に熱
気のあるものになっていたように感じた。のちに回収されたアンケートを見ても、そうし
た感想が多かったので、おそらくかなり満足度の高い公演だったのではないかとおもわ
れる。

【全体の感想】

この5日間で私が目にした範囲というのは、実際の仕事の全体からするとごくごく限られた
部分にすぎないのは承知しているが、それでも、初日の施設見学のときにはがらんとしていた
客席が、のこらず人で埋まり、すべての準備が整って演奏が始まる「開演」の瞬間、あるい
は終演後、未だ興奮さめやらぬといった面持ちで満足げに帰ってゆくお客さまをロビーから見
送るときには、なんとも言えない感動を感じることができた。今にして思えば、ひとつひとつ
手で封筒に宛先のラベルを貼ってゆく感じというのが、このホールのあり方のある面を象徴し
ていたように思えるし、それがあってこそ、このような本番での感慨につながったのではない
だろうか。私自身は落ち着いて演奏をきくことができたのはほんの数曲であったが、スタッフ・
聴衆の感触を総合すると、おそらく印象深い「いい」公演だったようで、それも幸運だった。

最後に全体の印象について述べる。スタッフの方々には、プロフェッショナルとして綿密な
計算のもと、手際よく淡々と問題を処理してゆくような面は終始感じていた。だが一方で、そ
れとは別に、ホールでの音楽の提供に携わるということについて、それぞれが個人的な信条を
強固に持って仕事にあたっているという印象も、同時に強く受けた。「いい公演があったときは
出てくるお客さまの顔が違う」というのはスタッフの方々が異口同音に口にしていたことであ
るが、そこからあらためて実感させられたのは、音楽とはシビアな経済的行為であるだけでな
く、そこに立ち会う人の皆に、ときに規格外のなにかをもたらす特殊な営為でもある、という
ことである。クールでドライでなければやっていけない面のある一方で、それだけでコンサー
トホールが動いているわけではない、ということを実感した。

1.2 京都コンサートホール インターンシップ報告

〔学生からの報告〕

文学部 音楽学専修 3 回生 田井中 朝日

1、概要

日時：2015 年 12 月 2 日～6 日（水曜～日曜）

場所：京都コンサートホール

京都コンサートホールは 1995 年に完成した京都最大級のクラシック専用のコンサートホールである。大ホール(客席数 1839 席)、小ホール(客席数 514 席)があり、大ホールには国内最大級のパイプオルガンを設置。指定管理者制度により、公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団が平成 24 年 4 月 1 日より管理を行っている。京都市交響楽団の本拠でもあり、同財団が運営している。

2、活動報告

【1 日目】12 月 2 日(水) 8:30~17:15

- ・京都コンサートホールについての説明
- ・施設見学
- ・チラシの挟み込み
- ・コンサートガイドの原稿確認

インターンシップ初日、まずは業務管理部の職員の方と顔合わせをし、その後、業務管理係長の前田さんから京都コンサートホールについての事業概要について伺った。概要は上記の通りであるがそれに加えて、私がインターンシップに参加させていただいた時期は 2016 年 1 月からのロームシアター京都のリニューアルオープンに向けた準備の時期でもあったため、京都コンサートホールの職員の方もロームシアター京都に出向いてその準備を手伝っているというお話を聞いた。

この日の主な業務はホールが毎月発行するコンサートガイドの原稿確認だった。業者から送られてきたコンサートガイドの見本と、主催者が提出した原稿とを見比べ、内容に間違いがないか確認する作業である。チケットの金額、開場・開演時間など細かいところまで確認するのでとても時間がかかった。イベント主催者から送られてきた原稿は手書きのものが多く、その字からイベントに込めた主催者の思いが伝わってくるように感じた。

【2 日目】12 月 3 日(木)9:00~18:00

- ・「おんがくア・ラ・カルト♪」研修
- ・京都コンサートホールの企画についての説明

事業企画課の研修として、自主事業である「おんがくア・ラ・カルト♪」のお手伝いをさせてもらった。「おんがくア・ラ・カルト♪」は、京都コンサートホールの田隅靖子館長がナビゲートする平日の 60 分ワンコインコンサートであり、今回はその第 19 回だった。京都市

右京ふれあい文化会館との同日開催で、午前は右京ふれあい文化会館、午後は京都コンサートホールで開催された。

《公演概要》

公演名：田隅靖子館長の“おんがくア・ラ・カルト♪”～ステキな曲とチョットいいお話～
第19回「いろいろなクリスマスソング！（わかりまっか？）」

お話：田隅靖子

ジャズ・ピアノ：竹中真

曲目：カラフル・クリスマス・メドレー

バッハ・メドレー（G線上のアリア～主よ人の望みの喜びよ）

ともしび～母さんの歌

クリスマスの讃美歌 ほか

この公演では、クリスマスにまつわる様々な曲が演奏された。館長も自らピアノを弾いて演奏を披露され、お客様もその姿を見て喜んでいたように感じた。

私は、午前はチケットもぎり、午後は出演者のCD販売を担当した。客層はお年寄りが多く、その中でも女性が多かったように思う。CD販売の隣で行われていた竹中真さんによるサイン会が好評で、多くのお客さんが出演者と話すために並び、笑顔で帰っていかれたのが印象的であった。

○事業企画課の福島さんに京都コンサートホールの企画についてお話を聞いた。公共ホールである京都コンサートホールは民間ホールとは違い、利益の追求だけでなく市民に利益を還元する必要がある。質の高い音楽を聴く機会を提供する公演、廉価または無料でいき、クラシック音楽を聴く層を開拓するための公演、市民自ら参加して創作活動を行う公演など様々な種類の公演を行い、さらに京都コンサートホールの特徴であるパイプオルガンを活用した事業も実施しているが、集客状況は厳しいのが現実であるようだ。

【3日目】12月4日(金)13:15~22:00

・レセプション業務

○大ホールで行われた「渡辺貞夫ジャムセッション」のレセプションの業務体験をした。

《公演概要》

公演名：京都新聞トマト倶楽部13周年記念企画

SADAO WATANABE NATURALLY ナチュラルリー/渡辺貞夫

演奏曲：渡辺貞夫「Naturally」を中心に17曲

2015年10月に発売された渡辺貞夫さんの「Naturally」の曲を中心に17曲、渡辺貞夫さん率いるバンドが演奏した。公演中は曲目をお客様に伝えず、公演終了後に紙で一気に張り出すという形態だった。

今回はサブチーフの山中さんに同行し、公演中に大ホールのドアに位置する全てのレセプションに指示を出す位置についた。曲間の出入りのみ許されていたので、曲間を伝えるために各曲の始まり・終わりごとにインカムでレセプションに指示を出した。急遽本番で事前にレセプションに渡していたリストにない曲を演奏したり、指定席にもかかわらず、休憩中にお客様から照明の関係で席を変更したいと言われるなど、臨機応変な対応が求められることが多かった。

偶然にも同行したサブチーフは大学3回生で私と同じ年齢だった。大学生から主婦までいるレセプションをサブチーフとしてまとめている山中さんは、私と同じ年齢とは思えないほどしつかりしており、私に業務を教えながらも常に全体を見渡していた。現場でのお客様に対する気遣いや言葉遣いを間近で見て、さらにレセプションとしての想いを同年代から聞くことができ良かったと思う。

【4日目】12月5日(土)8:30~17:15

- ・舞台業務
- ・パイプオルガン見学

○12月6日に行われる公演のリハーサル準備の舞台業務を経験した。ステージマネージャーの松山さんに同行し、スクリーンの設置やイス・譜面台・譜面灯の用意を行い、その後、大道具の宮村さんにホールの音響・照明など舞台の裏側を説明していただいた。この日一番印象深かった出来事は、リハーサル中の照明トラブルである。照明のトラブルで15分間ほどリハーサルを中断し、舞台全体に緊張感が漂うのを感じた。それまで和やかに話していた裏方の皆さんが一斉に動き出し、真剣に課題解決を図る姿を見て、裏方のかっこよさというものを感ずることができたと思う。舞台監督の衣川さんからは裏方は本番が始まるまでが勝負、大変なことはもちろんあるがその分やりがいもある、というお話を聞くことができたが、その一方で、他のどんな舞台を見ても段取りが心配になって感動どころではなくなるからおすすめはしないよと冗談交じりでお話しされていた。

○松山さんからパイプオルガンについてのお話を聞いた。大ホールに設置されているパイプオルガンは、1995年に京都コンサートホールが完成した際にオムロンから寄贈された。パイプの数は7155本と日本最大級である。一定の温度・湿度で保守する必要があるが、経費の関係からできていないのが現実だそうだ。パイプオルガンの音が鳴る仕組みや中の構造も教えてもらい、パイプオルガンの規模の大きさに感動した。

【5日目】12月6日(日)8:30~17:00

- ・グッズ販売
- ・ホームページ作成

○大ホールで行われた「京響プレミアム」のグッズ販売を経験した。

《公演概要》

公演名：京響プレミアム

京都市交響楽団「オーケストラ・ライブ・シネマ」

指揮・作曲：ティモシー・ブロック

管弦楽：京都市交響楽団

上映作品：「キートンの探偵学入門」（主演：バスター・キートン/作曲：ティモシー・ブロック）

「犬の生活」（主演・作曲：チャールズ・チャップリン）

「京響プレミアム」とは、京都市交響楽団があらゆるジャンルとのコラボレーションをするコンサートシリーズで、今回はバスター・キートンとチャールズ・チャップリンの白黒無声映画が京都市交響楽団のライブ演奏とともに上映された。指揮を務めるティモシー・ブロックが自ら音楽を手掛けた「キートンの探偵学入門」のオーケストラ・ライブ上演は今回が日本初で、音楽だけでなく映画の中の効果音までオーケストラで再現するところがこの公演の見どころだ。

私が体験したグッズ販売は、公演の開場から開演まで・休憩中・終演後の3回に分けて行った。京都コンサートホールのオリジナルグッズを含む、クリップや弁当箱などの雑貨を販売した。

グッズ販売を通して感じたことが2つある。1つは、この5日間で見てきた公演の中で一番若い世代が多かったことだ。子どもからお年寄りまで幅広い年代の人が集まっていた。同じ財団主催の「おんがくア・ラ・カルト♪」と比べても年齢層が大きく違い、対象の客層によって公演内容・公演時間も工夫していることを感じた。もう1つは、販売員としての立ち振る舞い方が難しかったということである。私自身、飲食チェーン店のホールスタッフや百貨店の販売スタッフなど、アルバイトでお客様と関わる経験をしたことがあるが、どれも声を大きく出して店を明るくし、お客様を多く呼び込むことが求められていた。しかし、今回の場合は同じもの売る仕事でも、声を大きく出すと逆に悪目立ちするし、お客様呼び込むことさえほとんどしなかった。もちろんそれではグッズは売れないし、たくさんお客様が来ていたにもかかわらず、3回の販売でグッズを購入する人は6人ほどしかいなかったが、今回はたくさん売れた方だったらしく担当の方は満足そうだったのが私にはとても不思議に思えた。

3、感想

5日間のインターンシップを通して、お客様と直接関わるレセプションистや、一から事業を生み出す企画、舞台を支える裏方などさまざまな角度から京都コンサートホールを見ることができた。ひとつの公演だけを見ても、そこには公演に関わるたくさんの人の思いがあることを肌で感じることもできたし、それらを繋いでいるのはここでは音楽なのだということも改めて感じることもできた。今回体験した業務はどれも私にとって楽なものではなかったが、それでも働いている人は皆どこか楽しそうにいきいきとしていたことが印象深かった。また、インターンシップという形ではありながらも5日間社会で働くという経験をして、いかに自分が学生であることに甘えていたか自覚させられた。1年後には社会の一員として働くことを自覚して残りの学生生活を過ごしたい。そういった面からも成長することのできたインターンシップであったと思う。

1.3 インターンシップ生を受け入れて

あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール 支配人 吉元 晃

ザ・フェニックスホールは、2015年度も大阪大学の学生さんを、インターンシップ生としてお迎えしました。今回は、大学院で音楽学専攻の名田青麻さん。期間は、2月22日(月)から26日(金)の5日間でした。

このホールは、損害保険会社が芸術・文化支援(メセナ)の拠点として、クラシック音楽を中心に良質な音楽を発信すると共に、趣向をこらした音楽活動を通じて地域社会へ貢献することを目的として設置・運営されています。

今回の研修は、名田さんが日々研究されている「音楽」が、上記目的で運営する音楽ホールにおいて、どの様に取り扱われ、どの様にお客様に届けられているのかの「現場」を知って頂きたいとの思いで行いました。その内容は、座学において「企画のあり方」や「広報活動の取組み」、「機関紙「Salon」の制作実態」や「券売活動」、「貸館での各種マネジメント業務などの実情」などを伝えました。併せて「券売活動」の一環である、公演チラシの挟み込み、「Salon」の発送作業等にも参画頂き、日常のホール活動にも少ない時間ではありますが体験頂きました。最終日の26日には、ティータイムコンサート「ハープ・アンリミテッド 福井麻衣リサイタル」の演奏会で、ゲネプロから開場・開演・終演、お客様の送り出し、演者サイン会の開催、演者の送り出しまで、一連の本番の実務を見学(一部体験)いただきました。なお、各研修時間には、研修担当者との意見交換ができる時間も設け、現場の音楽ホールが抱えている課題もお伝えしました。

音楽ホールの業務は多岐にわたっており課題も多いので、今回の短時間の研修で全てをお伝えすることは難しいと思われます。しかし、名田さんの「インターンシップ報告レポート」を拝見させて頂く限り、我々が行った研修の目的は概ね伝わったのではないかと喜んでおります。

インターンシップ生をお迎えし研修を行うことは、私たちにとって日々の業務を客観的に概観することで、新たな課題発見に繋がりホール業務を改善する契機ともなります。また、若い学生の皆様の新鮮な意見を拝聴することで、ホール運営の新たな課題を発見することも多く、大変有意義な機会であり、重要な取組みの一つと位置づけています。

「音楽」を知識面中心に取り扱う学生の皆様と、実務(行動)面中心に取り扱う音楽ホールが、お互いが得意とする分野で意見交換し、より良い「音楽」環境づくりを目指す機会がこのインターンシップ制度であると私たちは考えています。先人が言われていた「知行合一」に向けた取組みそのものではないかと思えます。

その意味でインターンシップは、音楽事業体と大学が産学連携をはぐくみ、深める貴重な機会です。今後とも引き続き、宜しく願います。